

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 4 3 号

2022 年 7 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 1 の手紙講解説教」より (1 3)

キリスト者の生活の意義と目的は復活

普通の人間が考えるようなこと、即ち、利益のため、あるいは偉大なる行為をするために生きる。そういう人々のために、私はエペソで獣のような連中の迫害を受けているのはどうしてか。それは復活の希望があるからであると言っています。この引用句（私たちは飲み食いしようではないか。明日もわからぬ命なのだ）は、当時のエピキュリアン派の哲学、すなわちこの人生はこの世で終りであるという思想からうまれたものがあります。この人生で快楽をもとめることが善であるという哲学であります。もしも復活が無ければ、このようになってしまうという。この快楽説は、パウロの好きなイザヤ書第 22 章 13 節にあるように、エルサレムが包囲されて、ユダヤ人が逃げ場を失い、明日どうなるか分からないという状況にあった時の話です。…パウロにとって、人生の意義と目的は復活することにあります。我々キリスト者の生活の意義と目的は復

活にあります。聖書を読めば読むほどそのことがはっきりして来ます。それ以外の目的はありません。もちろんエピキュリアン派やストイック派にも道徳的には立派な人もいました。このことはパウロもよく知っておりました。しかしパウロは、私の人生観、人生の目的はこれであると言ったのであります。それによって私は、日々死ぬほどの苦しみに勝ち得ているのであると。理論ではなく、実際であると言っているのであります。

復活なくして人生の意義はない

[コリント前書第 15 章の] 第 1 の感想

エピキュリアンやストイック派の人々は復活を否定しておりましたが、立派な道徳の持ち主でもありました。日本でも、儒教においても、来世のことについては、はっきり表に出ておりませんが、中江藤樹（1608-1648）や西郷南洲（隆盛）（1827-1877）などは、恐るべきほどの仁の持ち主でした。しかし、キリスト者においては、復活なくして人生の意義はない。これがキリスト教のエシックス（倫理）であります。これがなくては、キリスト教の道徳は生まれて来ません。

第 2 の感想

我々が復活を知らないということが罪であるということです。我々は、神を信じていると思っていますが、神について無知であることです。我々は、謙遜になって学ぶ必要があります。

第 3 の感想

復活は神の賜物であるということでもあります。福音とはこれを言う。罪の赦しを言う。罪赦されてそして神の子とせられて、永遠の生命を頂く、これを福音という。キリスト教の救いでは、「復活する者となること」を「救われた」というのです。

奥義

ここで、あなた方に奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きとともに、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。」(コリント I 15・51, 52)

「奥義」という字は、今まで隠れていて、新たに神によって示されたことであり、「啓示」と言ってもよろしい。「奥義」「啓示」というところに問題があります。「奥義」は人間の知恵を超えています。数学で言えば、3次元の世界に我々はおりますが、もしも4次元真理があるとして、それが、我々に示されたとすれば、我々の3次元の知恵をもっては測ることが出来ません。パウロの「奥義」の一つは、ロマ書第3章に出ている「奥義」です。即ち、人の救われるというのは、神の義によるということでもあります。これが、後に出て来る「奥義」の根底をなしています。これを「福音」と言います。この「福音」は、我々の生まれつきの人間の知恵をもっては理解し難いものであります。4次元の消息ですから。人に神の義が現れたとはこのことです。

奥義（続き）

ヨハネもペテロも同じ復活の信仰を持ってはおりましたが、本当にこれを理論的に説明したのはパウロであります。新約聖書の大部分はパウロが書いたと言っても差し支えありません。ルカ伝、使徒行伝の著者はルカですが、ルカはパウロの弟子ですから。パウロの書簡は、啓示が基になっています。従って「奥義」というものは、万人に語らねばならないが、万人に語ってはいけない。「奥義」を受け付けない人に、かえってつまづきになるからです。私は、宗教にはこういうことがあると思います。もし、宗教というものがこの4次元との交渉であるとすれば、どの宗教にもそういう「奥義」があります。

私は少しく浄土真宗というものを学びました。誰でも、有名な「歎異抄」を読みますけれど、その最後には、「右、斯ノ宗教ハ、当流大事ノ聖教為ル也。無宿善ノ機ニ於イテハ、左右ナク之ヲ許スベカラザル者也」。即ち、「右、『歎異抄』というのは、浄土真宗の肝心かなめのお経であるから、無宿善の機においては許したらいけない』（釈蓮如御判）と書かれています。この条文に注意している人は少ない。従って、「奥義」と言うものは、信じる人にとっては「奥義」であるが、信ぜざる人にとってはかえってつまづきになります。

内村先生の再臨の信仰

私は、恩師内村先生が、40の歳から57, 8歳まで、約20年間、柏木にこもって、聖書研究の塾を開かれたことを思い出します。先生はその後、その沈黙を破って、大手町にお出になったのは、「再臨の信仰」を明らかにするためでありました。この「奥義」を告げるためでした。しかし、当時の宗教家の指導者達は、内村先生に出ていってくれ、君がここで講演することは困ると言いました。追い出しにあったわけです。そこで、先生は弟子の藤井武氏をしてその理由を聞きに行かせたのですが、その理由ははっきりしなかった。そこで先生は青年会館を出られ、私立衛生会館で講義をされました。私の想像では、当時のキリスト教の指導者はこの「奥義」、再臨の信仰が分からなかったと思われる。日本のオーソドックスな講義に再臨を振り回されては困るためと思います。大体の神学者は、人間の知恵を振り回している限り、この「奥義」は分からないと思います。人間の知恵を超えた4次元の問題だからです。内村先生は、晩年にはあまり再臨の話をされませんでした。再臨は万人に語るべからずということがお分かりになったためであろうと想像します。再臨を語らずに、第1の揭示である主の贖い、十字架の贖い一本槍で説明されました。私はその意義が良く分かります。この第1の啓示を理解しない信者に、第2の啓示である「復活と再臨」を語れば、害あって益はありません。

行ないをもって伝道する

人に「奥義」を示す、即ち、言葉で伝道することにはある者にとってつまずきとなります。私は、言葉で述べる方法よりも、行ないをもって伝道する方法が最も確実な伝道であると思います。従って、永遠の生命を持つ人がどういう生活をするか、生活を見せる。そうすると、人は「あのよう生活するのはどうしてか」ということになります。そこで、それを求めるようになります。言葉よりも人間というものが福音を伝えます。最も明瞭に伝えます。パウロの信仰について批判する人は多い。しかし、パウロの持っている力、伝道師た力、また、人を愛した力にはみんな頭が下がります。議論する人は誰もおりません。パウロの力は死に対する勝利であります。人間の最も恐れるものは「死」であります。この「死」を征服する、勝利を与える、これが「復活体」であります。これは主・イエス・キリストの恩恵によります。この「主・イエス・キリスト」という3文字はフルネームです。聖書で、このフルネームが用いられている箇所は、非常に強調されている場所であります。この高円寺東教会は、この「奥義」を説きます。「奥義」の第1は、「十字架の贖い」であります。

復活の信仰に固く立て

「だから愛する兄弟達よ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなた方の労苦がむだになることはない、あなた方は知っているからである。」(コリント I 15・58)

これは結論に当たります。これはコリント前書 15 章の結論であるのみならず、コリント前書全体の結論であります。また、これは聖書全体の結論であります。ロマ書でもコリント前書でも、一言で言えばこれになります。…

ここの「堅く立って動かされず、…励みなさい」の「励みなさい」は、命令形で書かれていますが、原語では命令形ではありません。「堅く立て」ということと「動かされずにおれ」ということが命令形になっています。即ち「復活の信仰に堅く立て、動かされるな」ということです。…コリントの人々よ、君等はまだ、堅く立ってはいないではないかと。「今新たに堅く立て」と言っているであります。即ち「動かされない状態になれ」という意味です。…如何にパウロが復活の希望に重点を置いていたかが分かります。キリスト教の道德というもの、この復活の望みについて来るものです。これがこの世の道德と根本的に違う理由であります。「信・望・愛」と言いますが、キリスト教では、この「望」がなければ、「信」も「愛」も意味がありません。

置かれたる仕事は死ぬまで力を尽くしてやりたまえ

私は伝道だけが「主のわざ」ではないと思います。内村先生は「私は 40 年間、幾千の人々に伝道、福音を説いたけれども、果たして信じる人は幾人か」と言われました。その原動力はこの「復活の希望」にありました。この頃、内村先生のご本が売れ出したそうであります。私は、死ぬまで、たとい一人の信者が出なくとも、私はこの福音を述べます。君たちもまた、昇給がなくとも、誰一人認めてくれなくとも、置かれたる仕事は死ぬまで力を尽くしてやり給え。これが、教会に来られる人に対する私の勧めです。

目の前の義務を果たしつつ、我が主イエスよと呼ぶ

コリント前書 15 章 58 節には、「だから、愛する兄弟達よ、堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなた方の労苦がむだになることはない、あなた方は知っているからである。」とありましたが、これは「復活の希望に立て」ということでもあります。ペテロ、ヨハネ、パウロはこの復活の望みに立っておりました。目の前に復活を置いておりました。理屈や知識ではありません。だから、パウロは誰も恐れませんでした。当時の指導者に対しても、汝等がイエスを殺したのではないか、と言ったほどです。我々も、自分は復活させて頂く、という確信を持てるような信者になりたいと思います。

この節の後半では、「主のわざに励みなさい」とありますが、これが「愛」であります。この「主のわざ」については、私は十年前には「自分の前に置かれた義務」と解釈しておりましたが、現在は「主の名を呼ぶ」という業を加えました。従って、現在では、主のわざは二つあります。第1は「わが主イエスよ、と主の名を呼ぶこと」、第2は「目の前の義務をなすこと」であります。従って、私のキリスト教は、復活を目当てに、目の前の義務を果たしつつ、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことでもあります。どうかその生活を味わってみてください。